

『続・日本軍兵士—帝国陸海軍の現実』 吉田裕

中公新書／2025年1月／990円（税込）

2017年に刊行され、多様な視点から「戦場や戦闘のリアルで凄惨な現実を明らかに」し、大量の兵士の無残な死の実態を解明した『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』の続編。この続編には「帝国陸海軍の現実」という副題が付され、陸海軍が創設された明治以降の歴史に即しながら「無残な大量死が発生した歴史的背景」が解明されている。日清戦争期以降、兵士の健康維持・増進のために、食事・医療を始めとする様々な改革が両軍において行われた事実が存在する一方、陸海軍における如何ともし難い人間・人命軽視の構造が崩れることはなく、それが膨大な数の末端の兵士たちの絶望的な悲劇へと繋がっていく本質が明らかにされている。

『池上彰の経済学入門』 池上彰

ちくまプリマー新書／2025年2月／880円（税込）

辞書的な解説書ではなく、（難解と敬遠されがちな）経済学の基本事項を、多くの身近な話題を通して具体的に理解できるような工夫が凝らされている1冊。

『学ぶとは 数学と歴史学の対話』

伊原康隆・藤原辰史

ミシマ社／2025年4月／3,850円（税込）

数学と歴史学は対極にあるとみられがちだ。私（世界史）も勤務校で、数学の先生とそれぞれの専門について深く話した記憶はない。ところがこの書では、数学の大家と気鋭の歴史家が往復書簡の形式で対話し、問答していく。所々難解な内容があっても、二人の学問への情熱がひしひしと伝わり、学ぶことの楽しさを思い出させてくれる。読後に爽やかな気分となるのも、学問に向き合う二人の清々しさゆえか。

『ヨーロッパ史 拡大と統合の力学』 大月康弘

岩波新書／2024年1月／1,100円（税込）

近代とは、ヨーロッパとは、と問う書籍は数知れない。近代世界がヨーロッパを軸に形成されたことに異論はなかろう。では、そのヨーロッパは、私たちが近代の源流としてイメージするとおりのものか。西欧ではなく東欧の研究者である著者の視座で見直すこの書は、新鮮なヨーロッパ観を提示してくれる。

『内務省 近代日本に君臨した巨大官庁』

内務省研究会編

講談社現代新書／2025年4月／1,650円（税込）

分厚い新書を見かけるようになった。本書も500ページを超える。序論・通史編・テーマ編という構成で、テーマ編は特に、「社会福祉」的なテーマを取りあげた章と、内務省と軍部の緊張関係の章が興味深かった。テーマ編が独立独歩ではなく、テーマ同士で参照し合う記述が散見される。あとがきにあるように、研究会として組織されて、お互いの論を適切に摂取し、研究者同士で刺激を与え合っている姿が想像できる。通史編・テーマ編とあると後者が面白いものになるのが通例だが、本書はむしろ通史編を勧めたい。高校の日本史教科書は政治史が中心の通史だが、その多くに関わる内務省が具体的に何をしたかという記述はほとんど見られない。本書では内務省の人事異動が書かれ、政策担当者の意図や、人間関係も描かれる。高校の教科書では煩雑になってしまうために人名はカットされるし、教科書に載ることでそれが大学入試で出題されると困るが、やはり人名が出てくると、歴史が生き生きとする。

※「QRコード」は株式会社デンソーウェブの登録商標です。

編修・発行 実教出版株式会社 代表者 小田 良次 <https://www.jikkyo.co.jp/>
2025年9月25日 発行 発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5 Tel.03-3238-7777